

婦人関係資料シリーズ

国際資料 No. 37

アメリカ社会における
家族の性格

108

労働省婦人少年局

アメリカ社会における家族の性格

は し が き

この資料はアメリカ政治社会学会編『婦人の進出と責任』(“Women's Opportunities and Responsibilities, The Annals of the American Academy of Political and Social Science, May 1947)に掲載されたシドニー・マツナー・グルンバーグ女史の論文(“Changing Conceptions of the Family” by Sidonie Matsner Gruenberg)を翻訳したものです。これは、アメリカにおける家族の機能が、アメリカ社会の高度の機械技術、商業主義、自由競争、人々の移動といっためまぐるしい生活様式の変化にともなつて次第に衰退してゆくさまを述べたもので、緊密すぎる「家族結合」のなかに埋没しがちな個人をいかにして独立させるか、あるいはめざめた個人と家族との調和をいかにして解決するかが、いつばんに大きな問題としてのこつてゐる日本社会とは、いささか事情を異にしておりますが、近代家族の問題を考える上の参考に供したいと思ひ、刊行いたします。

1956年3月

労働省 婦人少年局

目 次

	頁
序 文	1
家族における変化の大要	1
経済的機能の喪失	2
家族の大きさ	3
婦人の地位の変化	5
1. 母親の負担	6
2. 母親の賢實	7
3. 生活の段階	7
男性の地位の変化	8
家族の移動	9
家庭の權威の衰退	11
家庭の要求するもの	11
責任一率先	12

アメリカ社会における家族の性格

序 文

現在アメリカ合衆国では、農村に住む人は人口の5分の1以下に過ぎません。しかし何世代にもわたつて、農村の生活を通して形成されてきた家族に関する概念や感情は、実際の生活様式や家族の働きに大きな相違があるにも拘らず、大部分の都市生活者の間に根強く残っています。「家族」というものについての伝統的な概念は非常に根強いので、家族という名で聯想される感じと、同じ「家族」という名で呼ばれている現実の制度との間には甚だ矛盾があります。この矛盾は家族と、他の種々の制度との間や、家族員自体の間にも数々の緊張をもたらしています。そして、こういった緊張は精神的、科学的及び技術的進歩によつて創り出された便宜を私たちが充分に活用することを妨けています。私たちは、家族というものがたどつた変遷の結果を考えてみるることによつて、家族の現実の機能、又その価値や限界や要求というものを、よりよく理解することが出来るのではないかと思います。

家族における変化の概要

1. 家族における変化の中、最も広く認められているのは、その経済的機能の果敢たる喪失です。家族が自治的生産単位から殆んど絶對的な消費単位となつたこの大きな変革についての経済的、技術的な面については広く研究されています。それらの変化は私たちの生活や人間関係に非常に深いつながりをもっているのですが、その影響については、一般にあまり認められていません。
 2. より端的にみとめられる変化は、今日の非農村地帯——人口の5分の4はそこに住んでいます——の家族の大きさが著しく縮小したことです。1900年以来40年の間に、市部の父、母、子供という「普通の家族」の大きさは、祖父母の家族（3分の2は農家）の4.55人に比べて、平均3.33人に減つています。すなわち、都市の夫婦はその祖父母が平均2.5人以上の子供があつたのに対して、1.33人となつています。世帯、すなわち遠い親族、同居人、召使等を含めた家族の大きさは更に小さくなつています。
- 今日では、社会的、経済的に最も進んだ家族は、同時に最も小さいものとなつています。今では両親がすでに小家族の二代、三代目だという家族が多々あります。そこで、子供たちは平均して、二、三代前の子供と比べて、きょうだいが少ないばかりか、いとかや、伯父、伯母の数も少なくなつています。戦争終結以来、結婚と出生が非常に増えましたが、家族の大きさには、さしたる影響はみ

られません。それ以後生れた子供達は大部分若い母親の最初の子供達だからです。

3. 社会の経済的、文化的な変化は、婦人の地位に変化をもたらしました。教育の普及と職業の機会が開けたことは、個人としての婦人の地位を向上させ、次第に、経済的に親や夫から独立させるようになりました。このことは生活の多くの面で水準を高めました。又同時に、婦人がホーム・メーカーとしての伝統的な仕事をしてゆくのが困難になり、そこに又、新しい問題が生まれました。
4. 次に、——一般にあまり気づかれていないことなのですが——婦人の地位に伴つて男子の地位に変化がおこりました。かつての家族の長は普通、賃金の稼ぎ手となりました。そして一日の大部分家を留守にしているので、彼のもつていた教育及びしつけの役わりは、次第に母親の手に移つてきました。また彼の稼ぎ手としての安定性はだんだん他律的となり、家長としての權威も次第に減つてきました。この様な変化は、妻や子供に対する関係を変えました。
5. かつての家族は家庭の中に安全に固定されていました。そして家庭は、土地に強く結びついていました。産業の発達と労働者の移動性を増し、ついには家族全体の移動性を増しました。家族が動き始めると、家族自体にも、地域社会に対しても新しい問題を起します。戦時中、移住が増えて、全家族の20%を含むに至り、その結果「追放流民」の問題を起したことは、歴史に未だ新しいことです。

ここにあげた種々の変化は、各々無関係のものではありませんが、家族の機能に対して明確な影響をあたえ、また家族員相互の関係及び家族社会一般に対する家族の意義というものに明確な影響を及ぼしています。

経済的機能の喪失

家庭の基礎的な仕事は家庭から離れたため、家族の教育的機能の相当な部分が破壊されました。かつて農村の子供達は、日々の経験を通して色々な技術やわざの基礎や、毎日の仕事の意味や価値を学びました。彼らは「共通の問題と個人の能力」ということから、他の人々とうりう風に協力するかということを経験しました。家の人々と一緒に働き、儀式を行い、遊び、休息しながら話をしているうちに、一般的な民間伝承を学び、人間関係や、くらしかたの一般通念や又世間一般のきまりや理想を学びました。

かの有名な「家の仕事」——それを通して私たちの祖父母達は忍耐力と責任感を得ることになつてた——それはもうなくなつてしまいました。少年や少女を不適当な労働や労働条件から守るために労働の軽減が行われましたが、そのことは子供達から事実上あらゆる仕事の経験や、それらの経験

から出る教育的な結果を奪うことになりました。それに伴って行われた学校教育の発表は、今尚家庭内で続いて行われている事柄があつたとしても、それに加わる機会から子供達をひきはなしてしまいました。若い世代の男女は総て多くの新しい特権や、教育や暇には恵まれましたが、家庭を運営するのに今でも必要な手続や技術や理解については、比較的無教育に育てられたのです。そして、彼らは又、家族のメンバーのために非常に役立つような洞察力や特別の才能を自分がもっているということをめつたに自覚していないのです。

変化しつつある家庭における教育のギャップを埋めるべく、学校は懸命の努力を惜まず、技術的、科学的発達に従つて必要となつた特別の教育を与えてきました。かつては少女達が単に家庭内で行われていることをみて育つただけで自然に学んだ家庭の手仕事や技能は、特別な学課目となりました。例えば、家政学とか家事経済とか、後には衛生とか栄養学とかという課目になりました。そういう課目を学校教育に採り入れることに常に反対があるということは、家庭についての昔ながらの概念と変りつゝある現実の間にギャップがあることを示しています。学校の教育課程に栄養の知識であれ、生産技術であれ、市民の責任であれ、新しい課目を追加する提案は横して反対されてきました。それらの課目は普通誰でも家庭で学ぶはずと思われる事柄と関係があるので、それは両親に対する非難を意味し、従つて両親は当然これをこゝろよく思わないというわけです。

家庭の教育的機能の喪失と、学校教育の発達とは多くの軋轢を生みました。学校教育にたづさわる人々は必要だと思われるたびに一つづつ加えて行きましたが、それは家庭の力を強くすることを目的にしたものではありませんでした。そういう変革は家庭の権威を弱め、家の無力ということを強調することになり、そして制度としての家と、学校との間に誤解と敵対意識を起させました。しかし、それは両親の側にも教師の側にも、いづれにも咎があるものではありません。

技術的変化や、それが日常生活に及ぼす影響というもの是非常に大きいので、家庭も、又学校もそのまゝでは、近い将来に父親や母親になる青少年達の子き助けとなることが出来ません。今日では、父親も母親も社会の指導者達も、家庭がその家族の生活においても社会を進めて行く上の基礎的な力においても、その機能を十分に発揮出来るようにするためには、より一層根本的な、またより一層広範囲の施策が必要であるということを認めつゝあります。

家族の大きさ

都市の小家族では、子供は相対的に孤立して育ちます。子供は恐らくあらゆる環境、年齢の人と交はることは出来るでしょう。また現代のこの複雑した状態の下では家の中には色々な親族や、或は

おじいさんかおばあさんが同居しているかもしれません。しかし、子供が直接に生活の關係をもっているのは、ごく少数の人にすぎません。家の中にたまたまといつて来た人の大部分はみな自身自身の計画なり、目的なりをもつていて、家族とか家族員とは大体無關係にくらしています。こうした孤獨な子供の両親も又、孤立しています。小家族になつて二代、三代目の母親は、姉たちや小姑たちや伯母達や近くにいる祖母たちからさえも、頼みもしない忠告や押付けをうけることがないことを喜んでいるかもしれません。が彼女は多分その自由の代償として、臨時の手助けや退屈な時の話し相手がなく、又非常に必要な忠告をしてもらえないという犠牲を払つていられると思われま

小家族では、両親は子供の為に特に子供の小さいうちはいろいろしてやらねばなりません。これらのことは古い家族では、他の大きな子供達や大人達が、気のついた時や、ついでに時に子供達にしてやつたことなのです。両親は父や母であると同時に友達であり、遊び相手という二役をしなければなりません。又きようだい、いとこ、伯母さんやおばあさんに代る人を見つけなければなりません。昔は子供達が何か自分達の遊び仲間をみつめて、自分達のグループを何気なく自然に作つていたのを、今日では親たちがよく考へて、作つてやらなければなりません。親たちは保育所や幼稚園をみつけたり、またそういう施設のない時はそれを一緒にはじめようという仲間をみつけることさえしなければなりません。こういった愛則は、シッター（註：子供と共に留守居をする人）という新しい社会現象において、そのクライマックスに達しました。大家族では家や庭の仕事をやりながら、赤ん坊に氣をつけている人がいつも誰かしらはいました。けれどもシッターというのはあくまでも緊急の策として、子供の傍に居るようになつたのまれた特別の職業人で、その子供について最少限の關心をもっているにすぎません。

親たちにとつて、自分たちが夕方出かけるために、あるいは子供達を朝のうち遊ばせる安全な所をみつけるために、また子供に適當な仲間をみつけるために、その他大家族では自動的に行われたような事をするために特別な計画をしなければならなくなつたことは、親の資格というものに影響を及ぼしているようです。家族とその仕事について古い考へをもつている部外者は、そういう親たちは、責任を他の人に転荷している」と大つびらに非難します。しかし、そういう計画を立てる親—子供達のために母親が始終一しよにいてやるということ以上に子供にいろいろなことをしてやろうと特別な配慮をする親—は最も良心的な親達なのです。

大きさがかわつた結果として起つた最も重要なことは恐らく親子の間の態度と人間關係の変化でありましょう。子供が一人かごく少数しかいない親達にとつて、一人一人の子供は当然非常に大切なのです。社会も又、子供達について、余計關心を持ちます。小さな家族では、親は子供にあらゆる

る「利益」を与え、子供のために出来るだけの事をしてやるだけでなく、子供の上に自分たちの望みをすべて集中しています。子供が思うままにふるまったり、親の支配から解放されて成長することは、とてもむづかしくなります。

社会的、文化的変化は、子供にかかる期待の水準を高くしました。若い親達は、一般に自分たちは自分たちの親達に比べて多くのことに恵まれて育つたこと、しかもその機会を充分に利用しなかつたことを意識しています。そこで、そういう親達は子供のために出来ることは何でもする代りに、子供から期待出来るあらゆることを要求しようときめています。彼らは、子供の数がごく少いので、沢山の子供をもつていた親たちとはちがつて、失敗したら代りがありません。親は子供を守るために子供のまわりにつきまとうだけでなく、その子の本当の能力や限度や要求とは無関係に、子供はこうすべきであるという親の考えどおりに子供が全力を尽すようにとつきまといます。親はえてして自分の望みを子供に達成させようとしています。その場合子供をよくしようとする努力はかえって深刻な緊張の原因となつて誤解や非行を生んでいるのです。

子供は遊び相手として、親や同年輩の友達他に、年上や年下の仲間を必要とすることは、よく知られていることです。子供は年上の子供から学び、一方年下の子を助け、それによつて年上の者や年下の者と一緒にやつてゆく上に必要なお互の心構えやすべを覚えるのです。子供達ばかりでなく、親達もまた、もつとレクリエーションの機会をもつたり社会生活へ参加して社会的関係を新たに作り出したりすることを必要としています。今日の家庭生活は大概の場合、家族員のそういう要求を自動的に満たしていません。

婦人の地位の変化

婦人が市民として、又経済社会における自由な成員として平等な地位を得た時、婦人はあたかも男性に出来ることは何でも出来るという感をあたえました。しかし、ここ数年間における出生率の驚くべき上昇は、大部分の女子が、なお子供を生み、育てることをやはり喜んでいるということを私たちに認めさせるのです。婦人に対する特別な訓練や職業の計画をたてられているということは、「大部分の婦人は常に働いてきた」という事実の延長であります。婦人は家庭や畑で働くだけでなく、町や他の家庭のためにも働ききました。そして、勿論産業や商売にも働いてきました。現在、約千百万から千二百万の婦人が事実上あらゆる職業に働いています。

結婚して家庭を離れても今まで自分が育つてきた様な家庭を新しく作つた昔の女子と比べて、今日の女子は普通直接学校や職場から結婚に入ります。彼らは屢々結婚生活に失敗します。というの

は、彼らの大部分は、家庭のむづかしい大変な仕事が比較的簡単な操作に代つてゐるのに、それでも家庭の日常の仕事に全く馴れていないからです。彼らは又、妻として、母として要求される家庭内の本質的な人間関係の基礎的理解にしばしば欠けています。学校に通つていたり、職業についているあいだはその中での自分の位置をよく知つていますが、家庭を作るとなると、自分があてずっぽうで、途方にくれていることをみだします。そして、大部分の同じ年代の少女達が同じ様に困惑しているのを知る便宜さもないのです。

1. 母親の負担

小さい子供がいて、家をわけられない母親は屢々もうこれではやりきれないと思うような事に直面します。パンを焼いたり、鰯節をこしらえたり、洗濯したりするようなことがみんなはぶけてしまい、あらゆる労働軽減の便宜をもつてしても、尚、する事が沢山ありすぎることに気がつくのです。このことはむづかしいなぞのように見えますが、その主な理由は、彼女は、彼女のおばあさんがどうやつて、新しい便利な道具もなしに、はるかに大きい家族や家をきりまわしていたかということがわからないからです。農村の家庭では子供は資産でした。それは子供の働きが、子供にかかる経費と同じ位だつたからではなくて、子供の働きがあるので、大人はもつとむづかしい、精密な仕事に集中することが出来たからです。子供の働きは、大人が子供でも同じ様に出来る軽い簡単な仕事をする無駄な時間を省きました。近頃の母親は、どうしても母親がしなければならない仕事にかゝて加えて、子供でも同じ様に出来る仕事に際限なく追われているので、必要な休息や夫と共に楽しむ時間や意欲をなかなかもつことが出来ないのです。

二つの仕事をしようとする母親は、どちらをも思うようにうまくすることが出来ません。子供の世話をしていると、家事の直接なさまたけになります。昔の大きな家族や世帯に合つた生活の仕方を忠実に追つてゆこうとするひとは、昔の母親が子供の世話をしなければならない時は誰か他に台所をみてくれる人がいたということ。又子供を入浴させている時に、電話やドアのベルが鳴つて邪魔をするということがなかつたことに大体気づいていないのです。働く人が少なすぎる所では、分業の利点は期待できません。非常に多くの仕事が家庭から除かれ、又同じく多くのことが専門家によつて行われている今日でも、なお家庭には相当量の掃除や洗濯や台所仕事や消毒の仕事などが残つています。そのうえ、今日の母親はそれぞれの仕事について、ラジオ、新聞、その他から受けるまちまちな忠告のためにまどわされています。

教育の機会の拡張の結果、職業的訓練を受けていない婦人でさえも、子供と家に閉ぢ込められていると、かつて重要だと教えられた外界の興味や出来事から除外されているように感ずるので

す。ラジオはありますけれど、孤立していることはたしかです。こういう母親たちは、結婚する前、あるいは子供を生むまえに持っていた人間関係を恋しく思うのですが、それは昔の婦人は大きい家庭の中で、又ふとん作りの手伝い会で、又小川の邊での洗濯でまいだしたものです。そして母親が感じる不満や憤りのどんなものでも、恐らく小さな子供達に悪い影響を与えるでしょうし、又夫や大きな子供達に対してさえも与えましょう。

2. 母親の資質

何百万という働く婦人は、我國の經濟に欠くことの出来ないものであるということが知られています。働く婦人の多くは家族を犠牲にして働いています。しかも家を留守にすれば避けられないいろいろの結果のために非難をされます。働く母親というものは——一つの階層として——不良の子供を作るといつてしばしばせめられます。地域社会の社会施設においても、又一般の態度をみても、私たちはまだこのデレンマとにつくり、とりくもうとしていないのです。

子供の世話をする施設というのは勿論作られています。しかしこれは普通、窮余の策か、いやいやながら慈善的にされたもので、母親が働いていようといまいと子供には集団生活の経験が必要だからという理由からではありませんでした。又一方、親たちのためばかりでなく、子供達のためにも保育所は価値があると考える人々によつて、よい施設をもつた保育所が設立されている場合でも、そこに子供をあずけると母親はひななをうけます。すなわち働かなくてもする母親は子供と一日中一緒に過ごすべきであるという仮定のもとに、子供を他人にまかせておくのはもつてのほかのことだというわけです。

婦人の地位についての最近の論争は、子供を生み、育てる仕事の大部分をするのは婦人であるという明らかな事実があまりに無視されてきたという点を指摘しています。母親であるということは、長い人生の中の偶然の出来事として放念してしまうことは出来ないものです。それは、そのための時間と、特別の奉仕を必要とします。勿論、母親の中には他の母親よりも子供のためになるように、満足のゆくまで子供と一緒に過ごすことが出来る者もあります。しかし、母と子の関係の特質というものは、どんな場合でも、一緒にいる時間の長さでは計ることの出来ない、より意味の深いものです。

3. 生活の段階

技術的、職業的訓練を受け結婚後も仕事を続け、男子と同じ様に能力をもち、成長して行く婦人の数は次第にふえています。しかし、子供が生まれると仕事を一時中止しなければなりません。そして、多くの子供が生まれることは無期中止を意味します。しかし、子供が大きくなるにつれて

家庭は初めの頃のような熱中させるような興味や用事がなくなります。そうになると、母親は家庭内では力を充分に使うことが出来ません。多くの人は仕事があればどんなことでもしてみたいと思うようになります。そして地域社会や特別のグループの活動に興味をもつようになります。しかし、もし出来るなら、自分が、そのために特別の訓練を受け、能力もある仕事に又つきたいと思いますが、それは不可能とはいわぬまでも、とてもむづかしいということがわかります。

職業的能力のある婦人に対して、結婚や子供を生むのをやめて、仕事を続けてゆくことを期待するのは、——そうすることをむしろ望む人もいますが——社会的にみて、妥当ではないと思われる。しかしながら又、専門の訓練を受けた婦人が結婚した時に、そのお金のかつていいる資格を投げ捨てるということも、同様に妥当でないと思われます。女子が受けた教育も実際の指導も、一度結婚や出産によつてさまたげられると、前の仕事に戻る道を可能にする条件にはならないのです。この様に成人した婦人の生活には、こういつたいいくつかの明瞭な段階があるということ、人々は共通の問題として知り、理解しなければなりません。

男性の地位の変化

今日、大部分の家族は賃金と月給にたよっています。しかし仕事の報酬としての賃金は、稼ぎ手の扶養家族には関係なく、次第に個人に対する賃金となつています。こういう事実から種々の家族手当の制度が生まれました。そのなかにはわが国の所得税法もふくまれます。しかし今迄のところ、その様な施策は大体事態の調節には、はるかに遠い一つのデエスチエにすぎません。家族の唯一の維持者又長としての「父」の伝統的な姿は、大方の父親の実際の状態とは調和しません。大多數の父親達によつて、これらの変化は權威と自信の両方を弱くしました。これは結果として、家族内相互の関係にも影響を及ぼしました。

父親は、共稼ぎの場合でさえも、依然として家族の扶養に責任があると考えられています。しかし、夫の収入は途絶えるかもしれませんし、妻の収入より下廻ることもあるかもしれません。そんな場合、夫婦はこの大変変則的とみられることを、感情的な障害なしに受入れる用意がないのです。また、母親というものは子供と家の世話をすべてする責任があるのだという古い考え方から、多くの夫婦は家族の必然的な変化に対して自分自身を合理的、实际的に調節してゆくことを困難にしています。多くの男性は子供のことや家事はものゝかずではないと思つていますが。しかも母親たちはそういう仕事について父親の手をかりるには、特別の好意としてか、ひとりでは仕事が出来ないのだという寛大な含みによるしかないのです。

婦人は経済的責任の多くを担っているばかりでなく、文化的、社会的活動をも多く担ってきています。例えば、現存の米国のハイ・スクール卒業生は、男子100人に対して、婦人は129人となっています。この様な変化は男性の相対的権威を低くしました。

多くの若夫婦が共同の仕事として、真面目に二人の問題を解決してゆく努力の中から、新しい家庭の型が生れて来ているようです。こゝでは両親は協力して、子供の身の廻りを世話し、しつけをし、教育や娯楽の計画をすゝめ、家計をきりまわしてゆきます。この様な夫婦間においては、平等といつてもすべての負担や利益を機械的に二つに分けるようなことはせず、二人の間の性の相違をはじめその他の相違も考慮に入れています。夫婦は、継続的な又は主な稼ぎ手の要求と、子供の世話をする養育の主な担当者の必要性の変化に応じて、仕事は平均に行われるよう心がけています。

多くの若夫婦は、夫は家庭外の職業をもっているもので、そのために或る点については、かばわれなければならないけれど、それ以外に時には夫は妻を守り、助けなければならないと考えています。夫婦がお互に相手に、又二人の共通の目的に対して責任を感じれば、二人の協力は、格然と独断的にきめられた仕事のやり方に固定されることなく、機能的で自由自在であります。

家族移動

アメリカの歴史では、開拓は一般に家族全体の移住ということの意味しました。何百万という人々が危険と不安定を知りながらも、将来に対して勇氣と希望にもえて冒険を試みてきました。しかしながら、そのうちに、家族の移動は開拓の意味がうすれ、やむを得ぬ移動という性格をとるようになりました。多くの親達にとって、これは何らの意味で後めたい又不安定な感じを与えました。というのは、家族に関する最も根源的考え方は、家は定着するものであり、子供達にも定着する機会を与えるという考え方だからです。

しかし、移住は避けることの出来ないものでした。ある町や近隣の学校に入つた一千人の青少年達のうち何人が自分達の子供を同じ学校に通わせるでしょう。今日の子供達のうちの何人が、彼らの親達が学び、遊んだ同じ広場や運動場で遊ぶことが出来るでしょう。近い将来において、大部分の家族及び個々の家族員は人口の変動に関係のあることが確かです。

移住とか、仕事や職業の変化ということが恐らく今後も私達の生活の形をなして行くでしょうから子供にとって本質的に重要な生活の安定というものを家族が一つの場所にとどまることの上にもとめることは出来ません。このため、生活を落着かせる継続性と安定性は、子供達がその成長期と一緒に過す人々に頼る可能性が単に多くなっています。そしてそれはまず第一に親たちなのです。

現在私たちの大部分は町や市に住んでいるので、移動した家族の運命というものは、定住者をも含めて、すべての人々にとつてますます重大なものとなつていきます。唯単に比較的住みついた人々の間で白い眼でみられるということだけでも移動者のグループは常に不利な条件におかれてきました。移住者の子供達は両親と共に、“よそ者”とか“邪険者”として扱われる憂き目をみています。移住者は周囲の人々のゆき方をとり入れるのはむずかしいことに気づきます。永久に住みつく意志をもつてさえも尙困難を感じるのです。しかし、彼らは又、自分達の伝統に固執することも同様に困難を感じます。もしこれらの家族の子供達が過失者や、犯罪者や神経病者や社会的に調和しない者に相当数なつたとしても、それは無事もないことであります。

移動する家族は、各々の信教なり生活様式を何処へでも行くところにもつていかねばならず、同時に、その家族はあまり歓迎されない行き先きざきの地域社会に調和しなければなりません。移住した先の問題に調和するように出来ている家族というものは殆んどありません。戦時中、軍のキャンプからキャンプへ、又仕事から仕事へ、夫の後について歩いた母親の多くはあわただしい家庭の中で、家族全体のために完全な休息所を作ることが出来ました。あらゆる困難と不安定の下にあつても、この様な母親達はどの子供にも必要な親しい、お互に思いやりのある雰囲気を作り出すことが出来ました。これらの母親達が幸いにも出来ることを、すべての母親ができるように社会は援助しなければなりません。この様な不利な環境の下にあつて活気に満ちた家庭を維持することは、広い意味で社会にとつて重要なので、それぞれの地域社会がそれを不能ならしめるために確固たる道を講じなければならないと思われまゝ。

一般に子供達や、又特別な助力を必要とする大人達に対する地域社会の責任は、渡り者が定住者になるのを待たず、これらの移住者の家族の要求をも広く包含しなければならないのです。なぜなら、そのときまでにとりかえしのつかない失敗が起るかもしれないからです。その場合、たとえ地方財政が財政的に損失を来たしても、又その費用がより広い範囲にわたらなければならないとしても、それは専門家にまかせるべき技術的な問題であつて、一国民又、夫々の地域社会にとつて、その人々は私達と何の関係もないからといつて、移動する家族を無関係な人々として扱うことは出来ないのです。確かに、もし地域社会がそれらの家族を、単にその産業が一時必要とする労働者の臨時的の附属物として我慢するだけとすれば、どの地域社会にとつても利益にはならないのです。社会が受け入れ、同化させることが出来ない子供達は、恐らく何年か後には、費用の節約によつて償われる以上の問題をひきおこすでしょう。というのは、その子供達もやがては子供をもつのですから。

家族の権威の衰退

種々の機関や専門家が、家族がそれ自体のために又家族員のためにすることになつていく仕事を、徐々に代つてやるようになってきました。これらの機関は直接に家族のためになり、強力にするような本質的な働きをしています。しかし、それはいつも家族の必要に応じて設けられるというわけではありません。時には、それ自体の目的と関心をもつた独立した制度として発達しているのに、家族に最も役立つものとしては不十分です。

子供達や青年男女は、その態度、価値観、標準や、何が良いことか、望ましいことかという考えの極く一部を家庭、学校、教会、衛生専門家又はレクリエーション・リーダーから得るにすぎません。彼らは広告その他態度や価値をきめるのに有力ないろいろなものの影響下にさらされることが増々多くなっています。

家庭はその影響力と権威を失つていっていますというのは、子供に充分な活動をさせる機会を与えることがより少なくなっているからです。両親と子供は感情的に強く結ばれています。しかし、子供が社会的、個人的に価値のある態度や技能を発達させるのに役立つような結びつきは殆んどありません。感情的な関係が主になり勝です。

工業、専門家、特別な機関などに任せる分が大変多くなつたので、家族は、家族員が生活を楽しむための愛と共助の交友関係となつています。しかし一方家族に対する伝統的な要求と、現実の状況とを調和させようとする努力が緊張をますます増大させているということを認めざるを得ないのです。

混乱と努力の中から、家族についての新しい概念が生れつつあります。そしてそれは両親の最も重要な今後も継続すべき役割として、子供たちが直面する現実の社会の矛盾を解明し、まとめて、子供を指導することを強調しています。しかし、この概念はもつと有意義な教育と、多くの家族が一生懸命自分自身のものとして求めているサーヴィスや助けを前提にしているのです。

家族の要求するもの

普通の家族は、それ自体では近代の、変化しつつある状態の下で、その本質的機能を遂行することは出来ません。家族が続けられるためには、次の事が必要です。

- (1) 学校及びその他の機関を通して、親又は近く親になる人のために特に企画された教育。
- (2) 家族が新しい状況に適応し、家族内のメンバーに互に融和することを助けるための特別相談機

関。

- (3) 家族が子供達の個人としての成長を指導し、又同時に親達も近代社会において個人としての生活を営むことが出来るようにするための地域社会サービス。
- (4) 家族がそのメンバーの健康を維持するための衛生のサービス及び教育。
- (5) 子供の福祉のため、又母親が自由に仕事に出たり、その他の事をする事が出来るように、適当な監督の下に、子供をグループで世話する施設。
- (6) 子供のために、四季を通じて、勉強と同時にレクリエーションと作業のバランスのよくとれたプログラムをあたえるために、学校その他の機関のプランを改正すること。
- (7) 家庭の中で行つても個人的、教育的価値の何もなく、むしろ家庭外で職業的な基礎の上で行えば経済的に、効果的に行われる仕事を家庭から切り放すために施設及び仕事を組織化すること。
- (8) 地域社会の生活において、あるいはレクリエーション、教育、市民活動等において家族間の協力をうちたてるための指導。

責任 — 率先

家族の維持と福祉に最も関心をもっているのは婦人です。婦人は家族の不調に敏感で、本質的な必要によく気がつきます。婦人こそ、この極めて重要な分野を開拓する戦いに応じ、責任をとらなければなりません。そして、婦人は個人として、また近隣社会の市民としてその複雑な役目を効果的にはたして行くことによつて、また家族員の幸福を更に進めて行くことによつて充分むくわれることでしょう。

著者 シドニー・マツナー・グルーナーグ

(Sidonie Matsner Gruenberg) は、1923年よりニューヨーク市のアメリカ児童研究協会々長で、連邦児童局の戦時児童問題諮問委員会の委員でした。又コロンビア大学の教育学部、その他の大学で児童の発育と両親の教育について講義をしています。雑誌「児童研究」の編輯をする他、専門分野の著作も多く、最近の著作としては「我々親達」(1939)があります。

アメリカ社会における家族の性格

昭和31年3月10日 印刷

昭和31年3月10日 発行

発行者 労働省婦人少年局 婦人課

印刷所 有限会社 工文社

東京都中央区日本橋本町2ノ1